

[原著論文]

## 明和大津波研究家，牧野清の研究スタイルとその今日的意義

寺本 潔\*・田本由美子\*\*

### 要 約

244年前、沖縄県八重山地域を襲った大災害、明和大津波を研究した故・牧野清の独自の研究方法や研究成果の今日的意義に関して、地元に残されている資料をもとに考察した。その結果、当時としては広い視野から科学的見地に立ち丹念な地域調査に基づく推論を展開し、実証的に大津波被害の解明に挑んだことが改めて浮き彫りとなった。その意義は、中央の科学者との積極的な交流、測量も加味した綿密な実地踏査と地図化、丁寧な古文書解読、さらに古老からの聞き取り、私費を投じた慰霊碑の建設等、多岐にわたっている。研究者としてだけでなく人格者としても優れた足跡を残した「八重山学の偉人」として位置付けることができる。

キーワード：八重山学，明和大津波，古文書，津波石

### I はじめに

牧野清（1910－2000、写真1参照）は、沖縄県の八重山を代表する歴史・民俗研究家であり、古文書を中心とした文献研究だけでなく、古老からの聞き取りや遺物の実地踏査にも長けた野外調査者（フィールド・ワーカー）である。没後、多くの識者からその業績に対し高い評価が寄せられた。例えば、地名研究家として著名な谷川健一からは、「すぐれた記憶力と資料保存によるもので独学で築き上げた研究記録には常に感嘆させられてきた」（「牧野清さん死去」を報じた平成12年10月23日沖縄タイムス記事による）と回顧されている。在野の研究者としては、「八重山研究の父」と称される喜舎場永珣の後継者としても位置付けられる人物である。とりわけ、助役という市の重職に就きながらも、休日を調査に当て、私費を投じて複数ものハードカバー装丁による研究書を刊行した熱意と実績は、敬意を伴って高く評価されるべき仕事であろう。

ところで、本稿の作成は、寺本が教員向けの防災教育指導者講習会の指導者として石垣島へ来島した際に、牧野の名著『八重山の明和大津波』並びに『登野城村の歴史と民俗』と出会い、共著者である田本に牧野氏の再評価につながる人物研究を持ちかけたことに発する。牧野氏に

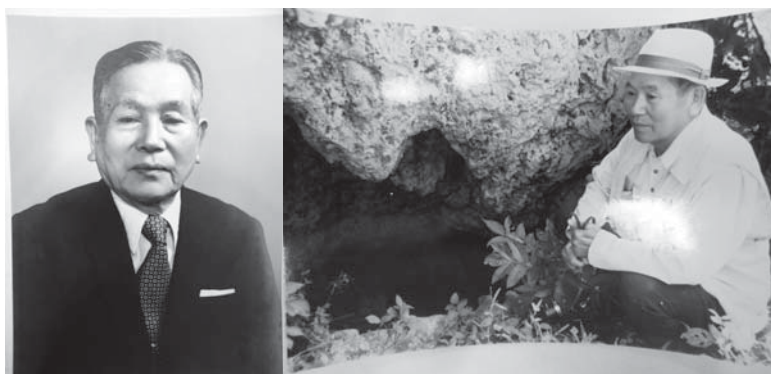


写真1 牧野清の遺影と津波石の前で座る様子

よる津波研究に関しては、石垣市の宮良台地を襲った波が、牧中の282尺（85.4m）の地点まで達しているとの主張に対し、何人かの識者からその高さに疑問視する意見が提出され、新聞記事を騒がした経緯があった。中には、牧野氏の推定が、あたかも津波を過大に捉え過ぎているかのような指摘さえなされ、研究全体の評価を下げる見方もあった。本稿では、これまでの津波到達高の論争を考察するのではなく、牧野氏がそれまで誰も実証的な津波石調査をやらなかった時点で、一人で解明に向けた努力を重ねた事実に着目した。八重山という個性あふれる地域にあって地元に住む者こそ、最も郷土を識る必要性を筆者らは感じているからである。幸い、石垣市立図書館に多くの原稿や書簡、蔵書類が保管されており、所蔵目録を手がかりに牧野氏が残した研究の概括が可能であった。しかし、残念ではあるが所蔵資料の中から津波石に関する取材ノートや実地踏査に使用した地図類は未だ二、三点しか発見できていないため、一次資料の検討は不十分である。現時点において、まずは津波研究に限り、牧野の研究スタイルの特色を整理し、今日的意義に関して言及してみたい。

## Ⅱ 牧野清のプロフィールと津波研究の開始

### 1 履歴の概要と津波研究の発意

明治43年生まれ牧野清は、15歳（大正14年）で八重山島庁給仕に採用され、その後戦前は台湾総督府殖産局商工課に勤務している。昭和7年に総督府の文官普通試験に合格し、技手や商工課庶務係主任を経て台湾石炭統制株式会社に勤務している。終戦の年、昭和20年には当会社の副参事にも昇格を果たしその有能さが発揮されている。戦後は石垣に引揚げ、持病であった結核を当時新薬として注目されていたストレプトマイシン81本を注射することで克服している。昭和28年からは石垣市総務課長に就き、収入役、助役の重職を務めている。さらに、昭和45年からは八重山郷土文化研究会会長にも就任し、郷土研究に傾注。自費出版ではある

が著書も多く、文化面で数々の受賞の榮譽に浴している。1968年に出版された名著『八重山の明和大津波』は初期の業績ではあるが、沖縄県外からも注目された。

牧野が明和大津波の研究にとりかかったきっかけは、自身が記した『回想八十年一わが人生の記録』（1997）に次のように記されている。「その年の三月十一日午前九時二十六分四十四秒には震度五の強震が島を襲い、古い瓦葺きの市庁舎はユサユサと大きく揺れ、われわれは大声を挙げて戸外へ飛び出した。（中略）『津波が来るかもしれない』と市民が騒いでいる旨の報告もあって、私は昔からの伝えを思い出してハッと、石垣島測候所に走って聞いた。『一時間位まで海面の変化がなければ大丈夫でしょう』と聞いて、直ちに職員をして海面の監視に当たらせた。（中略）この地震の体験は忘れ難いものがあり、研究の足は自然と昔の大津波の方向へと向いて歩いた。喜舎場先生も喜んで資料を提供され、いろいろと指導を頂いた。瀬名波長宣先生（第八代石垣島測候所長）から『測候所構内にある大きな珊瑚礁岩（ころび岩）はあの大津波のもって来た石。昔はギーラ（ヒメジャコ）もあったよ』と説明を受けた時は本当に目からうろこの落ちる思いで、巨大津波が殺到して島を蹂躪する凄惨な光景が彷彿と目に見えるような感を受けた。」（前書p. 239～240）とあることから、牧野は想像力に長けていたことが伺われる。大津波の惨状を自分の生活の場である石垣島に引き寄せてイメージできたことが、単に自然現象に対する知的好奇心だけでなく、郷土に対する深い愛情と災害教訓から学びたいと欲する牧野の実直さを裏付けている。

過去に起きた大津波による災害の伝承を単に言い伝えとして処理するのではなく、津波石という具体的な証拠を合計310件も一人で踏査し、正確な石の分布図を作図した努力は並大抵のものではなかった。ご子息からの聞き取りでは、50ccの小型バイクに乗って島内（とりわけ東海岸）をくまなく踏査していたという。大浜・白保地区あたりまでは、当時でも舗装されていたかと思われるが、牧野は島の東北部（平久保）の海岸に打ち上げられた津波石も調査している。筆者らも、写真2にみるように昨年、国指定天然記念物に指定された「石垣島東海岸の津波石群 安良大かね・やすらうふかね」を見学に踏査したが、浜に接近するのも容易ではなかった。



写真2 石垣市平久保の海岸に現存する津波石（安良大かね）を確認する筆者（寺本）

当時としてはさらに悪路の小道を踏査したに違いない。その行動力を支えていた熱意はどこから来たのであろうか。また、大川在住の牧野氏のいここに当たる花山孫位著『明和八年八重山大津波記』（123頁）1964年4月21日初版、1968年4月7日増補版発行の書籍の存在も大きかった。その書において、明和津波に関する当時の代表的記録である『大波之時各村之形行書（おおなみのときかくむらのなりゆきしょ）』の現代語訳が試みられたことも研究心を燃やすきっかけとなったに違いない。

## 2 中央並びに在野の研究者との研究交流

石垣市立図書館所蔵の牧野清コレクションの中に資料『大津波関係論文綴その一』があり、「津波石について」の手書き原稿が入っている。その中で「木村助教授は石垣市の牧野さんという方が、島史を調べているうち（中略）牧野さんは古文書をそのまま信じたわけで単なる仮説にすぎないのです（中略）その結果これまで津波石とされていたもののほとんどが津波とは関係のないものであることが分かってきました、と述べているが、それは木村助教授の甚だしい認識不足による筆者にとって洵に迷惑な発表である。第一、津波石は筆者が古文書をみて或いは陸上にあった珊瑚礁のかけらのような石をみて独自で津波石ときめたものではないのである。島々々々には古くから『ナンヌムチケール石』即ち『津波がもってきた石と伝えられている石がいくらかもあり、それにまつわる傳承もさまざまなことが伝えられてきているのである。津波石には牧野が勝手に津波石に仕上げたものに過ぎないとして津波否定論を展開しているやに見えるが、断じて筆者が珊瑚礁のかけらを津波石に仕上げたものではないのである（琉球新報1982年2月～3月にかけての6回にわたる反論「津波石はあった」より）」と強く反論している。

津波石の評価（年代や津波到達標高）に関しては、その後も多くの批判めいた論争が繰り返され、実地踏査を誰よりも丁寧に行った牧野にとっては忤怩たる思いを抱いたに違いない。さらに本編については次の経緯があったという記録も発見できた。「私（牧野）は『八重山の明治大津波』を熊本の城野印刷で校正している過程で上京した。その際、序文を寄せて頂いた東大教授東大地震研究所の宇佐美龍夫博士から、今村明恒博士の「琉球地震帯並びに明和大津波について」（昭和13年発表）という論文（中略）のコピーを渡され、「この際所見をのべたらどうか」と要請された。そこで、急きょ四国経由熊本に行く道中で原稿を書き熊本で追加し辛くも組み入れることができたのである。（論争の記録第一編より）」宇佐美博士という力強い応援団を得た気持ちであったことだろう。さらに、三好寿博士による『地震』第25巻第2輯（1968）「寄書」「1771年4月24日大津波について」には85mの津波高について三好が支持していることも力になった。

ところで、特筆すべき踏査として、1971年4月17日ガーランジ石が根付き石ではないことを証明するため、夫人の親戚4人の白保在住の男性に依頼し、シャベルや十字ツルハシによっ

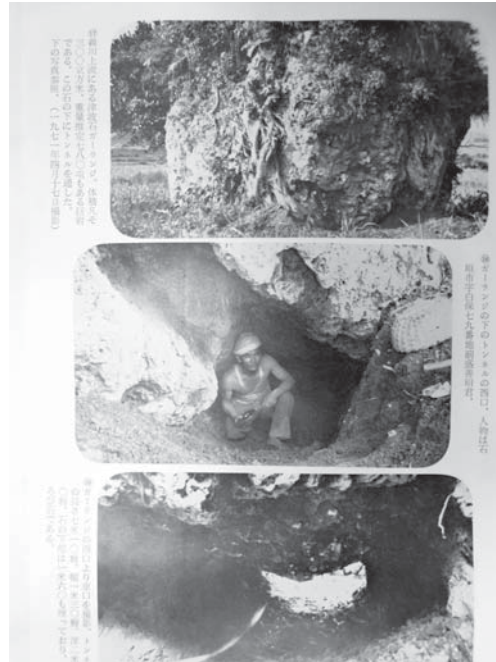


写真3 津波石の下部を掘り、根付きでないことを証明した様子を学術雑誌に報告（中央の写真に写っている人物は前盛善昭氏）

て石の下を掘った作業があげられる。「西から東に掘り進んだ。最初、大石の下を掘るので崩れないか心配しながら掘った。貫通した喜びに湧き皆で祝杯を現地であげた。当時60セントの駄賃を牧野さんからもらった。（前盛善昭さん談）」（写真3参照）

一方、津波の呼称に対しても異議が出された。八重山歴史研究会が、大津波の呼称は「明和」でなく、当時の琉球国の使用していた年号「乾隆」が正しいとする主張や形行書の役人が過酷な人頭税を課せられた当時の被害をより大きく報告しようとして被害を水増ししたのではないかと指摘したことに対しても牧野は強く反論。「当時の蔵元から調査に派遣した役人の名誉のためにも、また中国式の測量技術を導入していた点もあり信憑性のためにもすみやかに取り消してほしい（昭和58年1月31日八重山毎日新聞紙上）。」と牧野は蔵元の立場（八重山島頭大浜親雲上並びに八重山島在番筆者 翁長筑登之親雲上・真栄田筑登之親雲上ら数名）に立って訴えている。



### Ⅲ 石垣市立図書館所蔵『牧野清関係資料コレクション』から見てくる氏の研究スタイル

#### 1 所蔵文献リストから見てくる牧野の研究視野

牧野が所蔵する図書や史料・資料は自宅に保管されていたものが現在、市立図書館内にコレクションとして簡易的な目録と共に保管されている。この目録からおおまかではあるが、牧野の関心や研究視座を知ることができる。目録に記された資料の掲載点数は、764点にのぼる。コレクションの主な特徴は、台湾からの引揚げ関係資料や石垣市役所職員時代の行政資料（移民関係や火葬場、合併問題など）、尖閣諸島に関する著作、数点の青焼の地図や若干の取材ノート、研究論文綴り、新聞記事切り抜き、津波関係雑記綴り、新石垣空港問題記事、顕彰碑建立関係資料などである。段ボールに保管された膨大な資料の内、今回の調査（3回にわたる石垣訪問、延べ7日間）によって回覧できたのは、一部に過ぎない。津波調査関係資料に的を絞り、段ボールの中を時間をかけて閲覧したものの、一次資料である津波石の取材ノートに関しては、わずかししか発見することができなかった。

これらの資料から現時点で見てくる牧野氏の研究スタイルとしては、やはり大学や研究機関に勤務する専門分野に長けた学術研究者ではなかったため、体系的な資料収集が果たしていない点である。忙しい市役所助役の仕事の合間に推進した研究でもあり、また学術面を補完する大学図書館も石垣市内に存在しないため、科学的な見地からの考察においては限界があろう。しかし、遠隔地であったせいもあり、中央の研究者が取り組めなかった津波石の詳細な実地調査が、在野の郷土研究者として実現できたことは、むしろ牧野のような立場であったからできたと言えよう。牧野の研究から、野外科学（フィールドサイエンス）としての特色を見ることができる。

#### 2 ノート及び雑記類から見てくる牧野氏の研究スタイル

大学ノートに鉛筆書きで記された津波調査の記録は、野帳とも呼べ現地での筆記をイメージさせる。写真4は、「大石」と記された箇所の記載である。白保という集落にあるマジャンガーと呼ばれる井戸の付近を解説している。

また、写真5には、津波石の重量を推定した筆記である。牧野の調査は、素朴な方法ではあったが津波石の大きさからおおよその重さを推定しようと試みたようである。

これらの大学ノートは、牧野研究の一次資料として貴重であり、さらなる冊子の発見が望まれる。

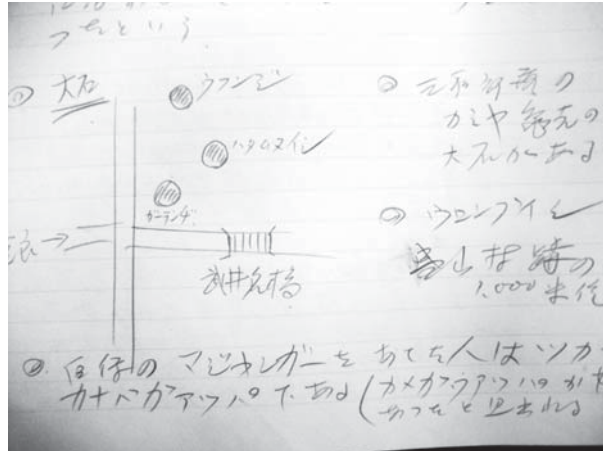


写真4 大岩に関する記載

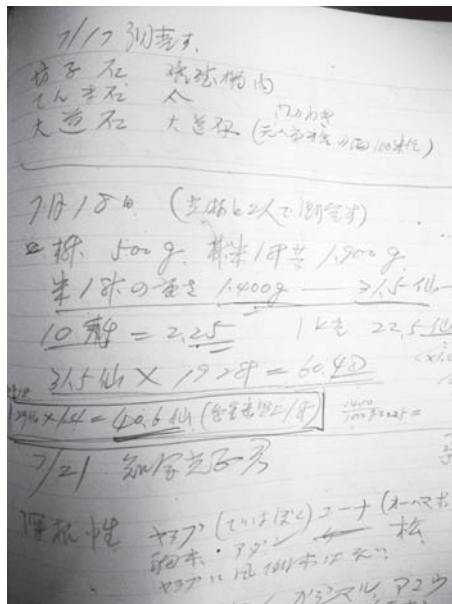


写真5 大岩を測ったと思われるノートの記述

#### Ⅳ 名著『八重山の明和大津波』の誕生とその今日的意義

##### 1 名著の誕生

牧野が優れたフィールドワーカーあることは、道なき道を踏み分け岩塊を調査、それが津波石である事を検証、310件に及ぶ津波石とされる石を地図上に記したことで証左できるが、一方においてかなりの科学的視点を持ち、基礎資料となる文献資料を読み解く能力に長けた一人であったことが名著「八重山の明和大津波」を誕生させた土台にあると捉える。

八重山には数多くの貴重な歴史的・文化的資料が残されている。そのことに関して、石垣市史叢書8「参遺状拔書」上巻及び9下巻の発刊のことばで大濱長照氏は次のように書いている。「沖縄本島及び周辺の離島では、『鉄の暴風』と形容され数多くの人命が奪われ財産・文化財の多くは灰燼に帰してしまいました。ここ八重山においても人々は戦塵にまみれ戦禍の中で痛苦を味わい（中略）同時に自然も文化も破壊されました。ただ地上戦がなかったことはまだしも救いでした。石垣市に所蔵されてきた数多くの文献や資料が戦禍をくぐりぬけて現在あるのも戦争による焼失被害が少なかったことにもよります。しかしそれにもまして重要なことは、わたくしたちの祖先が文化を大切にし、これだけの資料の保管に努められてきたことにあります。古文書をひもとく先人たちの生きざまを学びつつ将来を展望する……」

数多く残された歴史・文化の文献資料いわゆる古文書と呼ばれるもののの中に、明和8年の大津波から5年後に八重山蔵元（くらもと 琉球王府時代、久米島・宮古・八重山に置かれた行政庁）により調査・記録された「大波之時各村形行書」（おおなみのときかくむらのなりゆきしよ以下形行書と呼ぶ）や「大波寄揚候次第」（おおなみよせあがりそうろうしだい）「奇妙変異記」（きみょうへんいき）がある。

「形行書」は、現在次の6つの写本やテキストが確認されている。

- (1) 豊川家本
- (2) 識名新升家本
- (3) 大浜通子家本
- (4) 喜舎場永珣家本
- (5) 岩崎卓爾活字本
- (6) 花山孫位謄写本

加えて、牧野清「八重山の明和大津波」での翻刻掲載である。牧野が津波研究で、「形行書」を手掛かりに出来た背景に喜舎場永珣との子弟関係がある。

また、(6) 花山孫位謄写本の存在がある。花山は牧野のいここにあたり、彼からも多くの影響や示唆を得たであろうことは容易に類推できる。

牧野は、『八重山文化論集第3号牧野清先生米寿記念』（八重山文化研究会編1998）の「『津波石による津波発生時期の推定に関する研究』に対する所見」の中で次の様子に書いている。「明和大津波当時の八重山の政庁蔵元（くらもと）が調査した「大波之時各村之形行書」という、詳細な災害記録があり、恩師喜舎場永珣先生が所持しておられ、先生から資料として提供を受けた。」まさに、師弟関係から研究の芽が生まれたのである。花山孫位謄写本は、昭和39年4月に謄写版で刊行されていて、石垣市立図書館蔵「牧野清コレクション」の中に、花山孫位謄写の「形行書」がきちんと整理所蔵されている事からも、いここにあたる花山孫位の謄写を大いに参考にしたのであろうと捉える。

昭和43年7月、牧野は、「形行書」「候次第」「変異記」すべてを自費出版の「八重山の明和大津波」に翻刻（原文通りの内容を一時一句の増減・改変もなく伝えるように出版すること）



掲載している。これらの古文書の持つ文献的価値と後世の研究者や一般市民にも大津波の惨状を知らしめることの必要性を意識したからに他ならない。今でこそ、「形行書」や「変異記」は石垣市史叢書（石垣市総務部市史編集室編1998）として翻刻と読み下しが活字化され、文献史学に止まらず学際的な研究にも利用することが可能になったが、牧野が研究を手がけた頃は、本人の研究者としての資質や努力によるところが大きかったことはいうに難くない。

いずれにしても、牧野が優れたフィールドワーカーであると同時に優れた古文書解読者であったことが、津波研究を成立させ、名著「八重山の明和大津波」を世に送り出したのである。

「形行書」について牧野は改定増補版の翻刻掲載の前頁に次のように書いている。

一この記録は明和八年の大津波の後、当時の八重山の行政庁蔵元から琉球王府に提出された大津波の詳細である。その写本が二、三の旧家で保存されており、貴重な価値をもつ記録文書である。しかし「形行書」は竹富島の方までしかなく、黒島以下の不足分は別にある大波揚候次第の記録で補足して完全なものとなる。本書ではこれを補足整備の上完全な文書にして掲載してある。

一しかし虫害がひどく、すでに読めなくなっている文字もたくさんある。またこの記録が、当時の公用文書の書体であるむずかしい御家流の草書体で書かれていて、ひじょうに読みにくいので、本書では、これを楷書体書き改め、読みがなを付したものである。

一津波のあった乾隆三十六年は支那の年号で、日本年号は明和八年、その三月十日は当時使われていた旧暦の日付である。新暦では四月二十四日に当る。

一時刻も当時の表現である。五ツ時は現在の午前八時、七ツ時は午後四時に当る。

一四ヶ村は登野城村、大川村。石垣村、新川村の四村の一括的呼称で、略して単に「四ヶ」ともいう。この呼称は現在でも使われている。

一大地方とは当時石垣村の平得村（……省略）

一本記録にある当時の役職と、そのよびかたは次のとおりである。在番（ざいばん）親雲上（ペーちん）筑親雲上（ちくペーちん）……（省略）

一記録の中には当時の人々が、普通の会話の中に使っていたと思われる八重山の慣用語、たとえば「村長通（むらないどうし）」のような……（省略）

一本記録のふりがなは主として筆者のいとこにあたる花山孫位氏をわずらわした。

この記述は重要で、先行研究のない「形行書」を牧野がどのように研究し、翻刻していったかが証左される。

牧野の「形行書」研究はのちの研究に大きく寄与した。牧野の「明和大津波」が自費出版された1968（昭和43年）から数えて30年後1998（平成10年）に石垣市史叢書12（以下市史叢書12と呼ぶ）が発行された。市史叢書12には得能寿美により凡例と解題が掲載されている。一部を紹介したい。

・本書は、豊川家所蔵の「大波之時各村之形行書」「大波寄揚候次第」を底本とした。(凡例)とあり、解題では次のように書いている。「本書は、「大波之時各村之形行書」と「大波之寄揚候次第」の二種のいわゆる「明和の大津波」関係史料を1冊とした。前者は津波の被害状況を八重山から王府に伝えた公式の報告書とみられる。後者は、津波前後の状況において八重山側が王府に行政指導を仰いだ文書を集めたもので、石垣市史叢書8・9の『参遣状抜書』、同11『御手形写抜書』などと同様な往復文書集からの抜き書きのようだが、王府からの返書が収録されておらず、八重山側からの上申書だけとなっている。(中略) 本書で基本とした資料は、豊川家に伝わったものだが、ほかにもいくつかの家に同様の写本が伝わっており、そのことは「明和の大津波」という未曾有な災害に対する人々の驚きと、これを子孫に伝えようとした意志を感じる。「明和の大津波」に関しては、これまで種々の問題が提起され、多くの問題が残されているといっている。しかしここでは、確認されている写本の紹介とテキストの決定、原文における人口などの数値、現代語訳部分での度量衡、方角について凡例的に示すにとどめた。」

上記の様に、市史叢書においてもまだまだ解明されていないことが分かる。牧野は、自著のなかでも述べているように手探りで研究しているうちに、「形行書」と「揚候次第」が実はもともと1冊のものはないかという判断に達した。市史叢書に「右御系図座為御用相調部斯御座候 (みぎごけいずぎごようのためあいしらべかくのごとくにごぞそうろう) 以上

乾隆四拾壹年丙申(1776年) 桴海村柚山筆者 五月八日 大浜にや 若文子 宮良にや 同真栄田筑登之 崎山目差 小浜筑登之 伊原間与人 登野城与人 右相調部させ如斯御座候 (みぎあいしらべさせかくのごとくにごぞそうろう) 以上

申 五月八日 頭 宮良親雲上 石垣親雲上 大浜親雲上 在番筆者 饒平名筑登之親雲上 玻名城里之子親雲上

この一文を牧野清氏は、『これは形行書の末尾の部分であるにちがいないと判断し、喜舎場先生にその旨意見をのべたところ、先生も驚かれて検討の結果、『なるほどそうだ』と諒解された』(『改訂増補版八重山の明和大津波』)と記されている。

さらに、市史叢書には、「⑦牧野清著『八重山の明和大津波』は、昭和43年7月に刊行され、八重山歴史上に「明和の大津波」という一大事件があったことを人々に知らしめた功績は大きい。同書では、「大波之時各村之形行書」を翻刻されており、……」と記され牧野の功績の大きさを述べている。

牧野は「形行書」と「大波揚候次第」を翻刻しただけでなく、昭和56年11月、同書の改定増補版を刊行し、「形行書」のあとに「奇妙変異記」「馬艦水主並滞在人 (ばかんすいしゅならびたいざいにん)」を補足して、奥書きまで掲載した。

## 2 牧野の古文書・史料研究の特色

恩師喜舎場永珣から、喜舎場家所蔵本の提供を受けた牧野は、丁寧に「形行書」を読み解き、

翻刻するべく、写本したのであろう、その時生かされたのが書家としての牧野である。牧野は『回想八十年』でも書いているように、書家としてその達筆さが買われ、様々な場面で有用された。その技量が遺憾なく発揮され、「形行書」や「変異記」を読み説いていったであろう。

初めはその惨状を把握し、被害状況から大波の進入経路や、波の高さを類推しようとした。当然すぎる研究のスタイルである。しかし、牧野は「形行書」や「変異記」を解読し読み解いていくうちにその記録の不十分さを認識するようになっていった。牧野は「八重山の明和大津波」の中で次のように書いている。

「明和8年、西暦にして1771年八重山・宮古両群島を襲った大津波があった。昭和42(1967年)から数えて196年前のことである。この大津波に関しては、八重山では「大波之時各村之形行書」「大波揚候次第」という記録が残されている。中略 この「形行書」は当時の人の目で見、当時の人の頭で書かれたものであるだけに、生々しい記録であり、史料としてひじょうに貴重な価値を持つものと考えられる。ただその島内への進入の経路や、状況その他、重要な多くの事が省略されていて、結果だけを重点的に扱った、極めて素朴な、記録であるという感じでもある。二百年に近い古い時代を反映したもので、それはやむをえないことであるといわねばならまい。」

丹念な古文書としての「形行書」の読み解きや研究から、一級史料としての「形行書」の欠落部分や省略部分が判明したのである。皮肉ともいえるが、「形行書」の実態が研究者としての牧野の心に更に火をつけたともいえる。続けてこう記している。「しかしこの稀有の大津波は、人間の社会と無関係の無人島や、砂漠の中の出来ごとではなく、人間の社会に、そして人間の生活に、致命的な実害を与えた自然災害であるだけに、なんとかして記録の省略されている部分を補充し、その全容を復元して、改めて現代の頭でこれを書き直して見る必要があると筆者は考えた。」

牧野は、「形行書」を一級史料としてその価値を認め、広く知らしめるべく研究、翻刻したと同時にその欠落・省略部分の補充・補完をめざし、稀有な自然災害の全容解明を志したのである。

その根底にあり、多忙な身で、研究に着手した意思を次のように記した。

「この記録（形行書）を読んで筆者は以上のようなことを感じ、考え、それが幾年か頭の中で去来し、点滅した。そして果たして自分の力でこれをなし得るかどうか、自問自答もしたが、その面での専門的な学識もない上に、健康上、勤務上の関係などもあって、踏み込むべきかどうか、容易に決しかねるものがあった。しかし心の片隅では、「本土の学者や研究家が続々来島して、八重山の歴史や、民俗・言語・民謡・宗教・地質などをひじょうに貴重なものとして学術的な調査をしているのに、わが郷土ではこのような面の仕事をしているのは、喜喜場永珣先生、瀬名長宣先生、宮良賢貞先生らのほか今日までのところきわめて少ない。まったく宝の山に坐して、手をこまねいているかっこうではないか。われわれもよろしく地の利を利用して大いに郷土の各面に、科学的メスを入れて掘り下げて見る努力をすべきである」とささやくこ

えがあった。」

牧野は古文書の研究から一層この重大な災害である津波研究に心をゆさぶられながら、大いに自問自答しつつ、この研究の必要性にかられ、また地元の人間としての郷土愛の心にもつき動かされたのであろう。そして、研究着手を決定づけたことを「このように自問自答をくり返しているうちに、もし自分がこれを手がけるとすれば、どうしても郷土歴史研究家の、喜舎場永珣先生（84才）の御健在中であることがいちばん望ましいという、決定的なことに気がついた。と……

いかにも八重山を愛する研究家牧野らしい心情の吐露と強い子弟関係を感じさせるものがある。牧野の古文書研究は前述のように喜舎場先生から多くのご指導や教示を得られたことは誠に持って幸いであった。次に、「大波之時各村形行書」大波揚候次第の書き出しを読み碎き文にしてあるものから一部を引用してみたい。

一 八重山島の儀、そう頭、男女二万八千九百九十二人まかり居り候ところ、乾隆三十六年三月十日辛亥時分大地震これあり。右、地震あい止み、即ち、東方鳴神の様轟き、間もなく外の瀬まで潮干き、所々 潮群立、右、潮一つ打ち合い、もってのほか、東北、東南に大波黒雲の様翻り立ち、一時に村々へ三度まで寄り上がり、潮揚がり高二十八丈あるいは十五・六丈あるいは二・三丈、沖の陸石へ寄り揚げり、陸の石並び大木根ながら引き流され……（中略）……

牧野はこの古文書の記載を根拠に、つぶさに現代の科学的知識や地道なフィールドワークを重ねて津波石や津波の進入経路などを研究・検証していったと思われる。

### 3 津波石の分布図作成と伝承採集

津波石をどのように調べて分布図を作製したのか、合計310箇所にも及ぶ津波石を調べたと本人は書いている。50CCバイクにまたがり、休日を使って東海岸に出向き、それほど多くの数の津波石を調査した熱意と努力は驚異的とも言える。足久保地区は牧場であり、道も舗装されていない。とてもバイクで走ることができる道ではないため、国道にバイクを停めて牧場内や林地に分け入って津波石と思われる岩塊を調べたのではないか。かなり時間を有するフィールド調査であったろう。この中で古老からの津波にまつわる伝承も記録に努めたはずであるので、調査に要した時間はかなりの時間と想像できる。そのエネルギーがどのように湧きでてきたのか、牧野氏の津波石調査にかける情熱は想像以上であったに違いない。『八重山の明和大津波』に掲載されている津波石の分布図を見れば、凡例から石の大きさを4種類に分類していることが分かる（図）。

特大型、大型、中型、小型の4種類である。分布図からおおよそ列状に津波石が見られるこ





図 津波石の分布を示した地図 (牧野清著『八重山の明和大津波 (改訂増補)』折りたたみ資料より)

とある塊りをもって分布していることが見てとれる。列状は海岸段丘崖や道路に沿った形状であり、地形条件や調査で見出しやすかったことも影響していると思われる。また、ある塊りを持って分布していることは、台地の間の低地や窪地に多く分布している様子を示している。位置の精度は残念ながら高くなく、▲や■、●、◎などの記号によりおおよその位置にドット(点)として貼り付けてある。このことから、牧野が未発見の津波石も島内には未だ存在していることも予想されるだろう。分布図作製にどのような地図を活用したのか、コレクションには3点の地形図が所蔵されているに過ぎない。助役の立場であったため、都市計画図や土地



改良図は容易に入手できたはずである。どこかに、津波石の位置を手書きで記した地形図が残っているはずである。今後の課題としたい。

さらに、古老からの聞き取りも牧野は実施している。人魚伝説など、ユニークな被害にまつわる説話や伝承が当地には残されている。これらの伝説に関する検討も今後の課題である。さらに、牧野は大津波によって女性の犠牲者が多い点にも関心を寄せている。「地震、津波災害研究の一側面—なぜ女の犠牲者が多いのか—（1988年7月26日の綴りの中の手書き原稿より）の中に東京都立大研究センターの望月利男教授らの調査結果で「女が多く死ぬのは老人子供を守る行動が原因とする研究成果を読む」という記述があり、牧野らしい想像力豊かな推論が發揮されている。

#### 4 津波災害への警鐘

単なる過去の自然災害を掘り起こしただけでなく、牧野氏の果たした行いは、啓発や警鐘を鳴らす意味を持っている。その第一は、明和大津波遭難者慰霊碑の建立事業である。240年以上の前の自然災害を歴史の中に留めることなく、津波で亡くなった多くの島民の霊を少しでも鎮め、今日の石垣島の安泰を願う意味がこめられている。宮良川の上流の見晴らしのよい台地突端に慰霊碑が建設されているが、その土地を探すには苦労を重ねたようである。コレクションに残っている『明和大津波遭難者慰霊之垣建立経過報告』（毛筆手書き資料）によれば、建設用地に牧野氏は次の五点の要件を備えた土地でなければ相応しくないと考えていたようだ。その五点とは、

- 一、御獄などに見るような聖地性ともいべき環境や雰囲気をもつ場所が望ましい。
- 二、大津波とゆかりのある土地であること。
- 三、海の見える高台地であること。
- 四、或る程度交通の便のあるところ。
- 五、絶対に現在、農耕地は避けること。必ず、原野、不可耕地を求めよ。

であった。慰霊碑は被害の大きかった白保や大浜からも近く、海が望める高台にある。当初「この五原則に沿う場所は殆ど見当たらず困り果てたが、昨年6月13日、ついに牧野と前盛二人は原野に囲まれたここタフナー原のタコーラケ石の場所に到達いたしました。」と『経過報告』に記されているように土地勘に詳しい牧野氏でもなかなか適地選びには苦労したことが判明する。

後世に警鐘を鳴らす行いの第二として、牧野氏は著書を東北地方の自治体や皇太子（現天皇）にも謹呈したこと（宮内庁からの寄贈受付書面が雑記資料にあり）は特筆に値する。ご子息の光博氏談によると「何十冊もの本を自転車に載せて、郵便局まで持っていき船便に乗せる作業を手伝った。しかも郵送費も私費であった。」という。出版費用はもとより、寄贈に要する郵送費までもご自身の収入から工面していた事実は、明和大津波を過去の出来事として歴史の中

に葬り去るのではなく、そこからの教訓や津波災害への警鐘を書き残しておきたいとの並々ならぬ思いが込められていると言えよう。

## V おわりに：牧野研究からの継承すべき課題

1998（平成10）年 牧野氏は第八回東恩納完淳賞（琉球新報社主催）を受賞した。その時の新聞記事を見ると、「地域史研究に尽力 明和大津波を実証的に解明」との見出しがある。「東恩納完淳賞」は、沖縄研究の先駆者である東恩納完淳の功績をたたえ、沖縄を対象とする史的 연구に顕著な業績をあげた研究者に贈るために設けられたもので、牧野氏の受賞は世の多くの人が等しく認めるものがあった。長年の八重山の郷土史研究や文化振興に尽力された功績が評価されたのであるが、とりわけ「明和大津波」の研究の功績が大きかったことは言うまでもない。それが見出し等にも表出している。

1998（平成10）年発行 『八重山文化論集〈第3号〉—牧野 清先生米寿記念—』八重山文化研究会編に同会会長の石垣繁氏は次の様に記している。

献呈の辞（途中より引用）

「ところで、私たちは本土復帰の1972年4月に喜舎場永珣を、8月には大浜信賢、そして12月には宮良賢貞という八重山研究の大先達を一年間に三名も失いました。まことに痛恨のきわみでありました。これら大先達と私たちの間には四十年余の年齢的な断層があり、その空間を埋められた方が牧野清先生であります。（中略）このたびは、牧野清先生の米寿を記念して教えを受けた会員諸氏が『八重山文化論集第3号』を編むことになり……ここに八重山文化のためにも先生がますますご健康であられるよう祈念しつつこの一書を捧げるものであります。」

また、あとがきに牧野の功績を・〈数多くの大書を刊行〉・〈後進の指導育成に当る〉と大きく二つにわけ述べたあと、「正に今回の受賞は人間・牧野清氏に対する受賞である。」と書いて牧野をたたえている。

牧野がそもそも郷土史の研究に関心を持つようになったのは、喜舎場永珣らと共に『石垣市制十周年記念誌』（昭和43年）編集に携わったことにあると言う。昭和四十五年に公職を退いてからは精力的に資料収集に専念し、……（文化論集石垣繁氏）

そして次々に著書を刊行した。

- ・1969（昭和43）年『八重山の明和大津波』（初版発行）
- ・1972（昭和47）年『新八重山歴史』
- ・1975（昭和50）年『登野城村の歴史と民俗』
- ・1976（昭和51）年『川平村の歴史』（監修編集）
- ・1981（昭和56）年 改訂増補『八重山の明和大津波』（再版発行）
- ・1997（平成9）年『八重山のお嶽』

上記の著書一覧を見て思うことは、公職にありながら多忙な身で、津波研究に着手した背景

や動機には、なみなみならぬものがあつたに違いない。何がなんでもやらねばという強い思いが感じられる。

さらに、牧野自身は、初版本のあとがきに次のように書いている。

「公私ともひじょうに多忙の中、1968年3月、ひととおりの原稿を書き終えた。正直のところ、多年胸の中に発酵しつつ、うっせきしていたもろもろの思いを、ともかくも文章に書きうつしたわけで、本当にホッとした。この津波に関心をもち、観察を始めてから十年、実地に調査と執筆をはじめから三年にして、ようやく胸をつくようなけわしい山道を、息をはずませながらやっと通りぬけたという感じである。この津波の実態を調査して見て、(中略)その規模の余りにも巨大なことに驚いた。(中略)そしてわが郷土に再びこのような、おどろくべき自然の災害が起こることのないよう、神にも仏にも祈らずにはおれない気持である。」(中略)続けて、「正直のところ、この仕事は筆者の生涯における一大事業であつた。そして実子は長男一人しかめぐまれなかった筆者にとっては、この小著はちょうど第二子を生み育てて来たような気持である。社会の役に立つ子になってほしいと願う世の親心そのままに、筆者もまた心血を注いだこの小著が、少しでも世の役に立ってくれるようにと心から祈りつつ、このあとがきのペンをおくことといたします。」このあとがきを読みながらしみじみと思う。牧野の行った研究の今日的意義あるいは遺したものとは何であろう。後世の私たちが継承すべき課題は何か、牧野から送られているメッセージとは何であろうか。

古文書を読み解き、「形行書」と「候次第」が元々是一个の文書であつたことを突き止めたことや、心血を注ぎ、調査・研究し名著「八重山の明和大津波」を世に出したこと。八重山郷土史研究の先駆者喜舎場永珣翁の後を継ぎ、郷土研究の充実発展に寄与したこと。後進の育成に尽力し八重文化研究会の初代会長として18年間会活動、文化研究に貢献したこと。津波石の文化財指定に向け要請活動を行い、2013年5つの津波石が「石垣島東海岸の津波石群」として国指定天然記念物となったこと。明和大津波遭難者慰霊塔の建立にこぎつけ、建立させた事、等々人間牧野が行った研究と後世へ残したものは大きいと言わねばならない。

もっとも重要なことは、牧野の危惧した自然の驚異、明和大津波という未曾有の災害に対する再認識とその全容の解明ではないだろうか。つまり、牧野のとした研究者の高い志を受け継ぎ、更に深化させ、研究の精度を高め、異議について推論を進め、解明していく「志の連鎖」ではないだろうか。その意味で本論文で扱った牧野自身の研究スタイルや努力の軌跡そのものに防災教育教材としての価値が見出せるかもしれない。

牧野の死後、2011(平成23)年3月11日、我が国はこれまで経験したことのない東日本大震災を経験した。私たちは世界に冠たる地震・津波大国なのである。この事に警鐘を鳴らした牧野の「志」を継承し、「形行書」の欠落や不十分部分を埋め、明和大津波の解明と災害教訓の継承こそが今日に生きる私たちに課せられている。

## 謝辞

石垣市立図書館司書の方々には、牧野コレクションを閲覧するため、特別室の使用を許可して頂きました。また、ご子息の牧野光博氏には聞き取りに協力して頂き、貴重な図書まで寄贈して頂きました。記して感謝の意を表します。

## 参考文献

- 琉球大学島嶼防災研究センター（2013）『沖縄防災環境学会シンポジウム概要集 発掘調査が証す歴史津波の実態』同学会発行，30ページ。
- 寺本潔（2013）「社会科が担う防災意識の形成と減災社会の構築」『社会科教育研究』（日本社会科教育学会）第119号，pp. 48～57.
- 寺本潔（2012）「防災教育の自校化と社会科の果たす役割」『地理学報告』第114号，pp. 29～38.
- 島袋綾野（2012）「石垣島—残された明和大津波の痕跡から学ぶ」『八重山博物館紀要第21号』pp. 50～65.
- 石垣市総務部市史編集課編（1998）『石垣市史叢書12 大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第』120ページ。
- 石垣繁（1998）「牧野清氏の人と業績—学問追求に道標—」石垣文化研究会編『八重山文化論集第3号—牧野 清米寿記念—』ひるぎ社，pp. 423～425.
- 牧野清（1997）『回想八十年—わが人生の記録』（私家版），292ページ。
- 牧野清（1981）『改訂増補 八重山の明和大津波』（自費出版），462ページ。
- 花山孫位（1964）『明和八年八重山大津波記』（私家版），123ページ。

## Relevance of the Research Figure of the Scholar, Kiyoshi Makino about the Big Tidal Wave, that Target Meaning

Kiyoshi TERAMOTO, Yumiko TAMOTO

### Abstract

It was related to the target meaning of the way of studying it that the big tidal wave which hit Yaeyama area of Okinawa Prefecture, the point 244 years ago, was studied and examined. It stood up in the scientific viewpoint, and this research was based on sense of area investigation as those days as that result. That feature is that it challenged the elucidation of the damage due to the big tidal wave positively. Active interchange with the scientist in Tokyo, the practice exploration that it is minute, map preparation, ancient documents decoding, cenotaph built at his cost hearing from old man, were made clear from much knowledge. He was an excellent man.

**Keywords:** research on Yaeyama, big tidal wave, an old document, the rock carried by the tidal wave